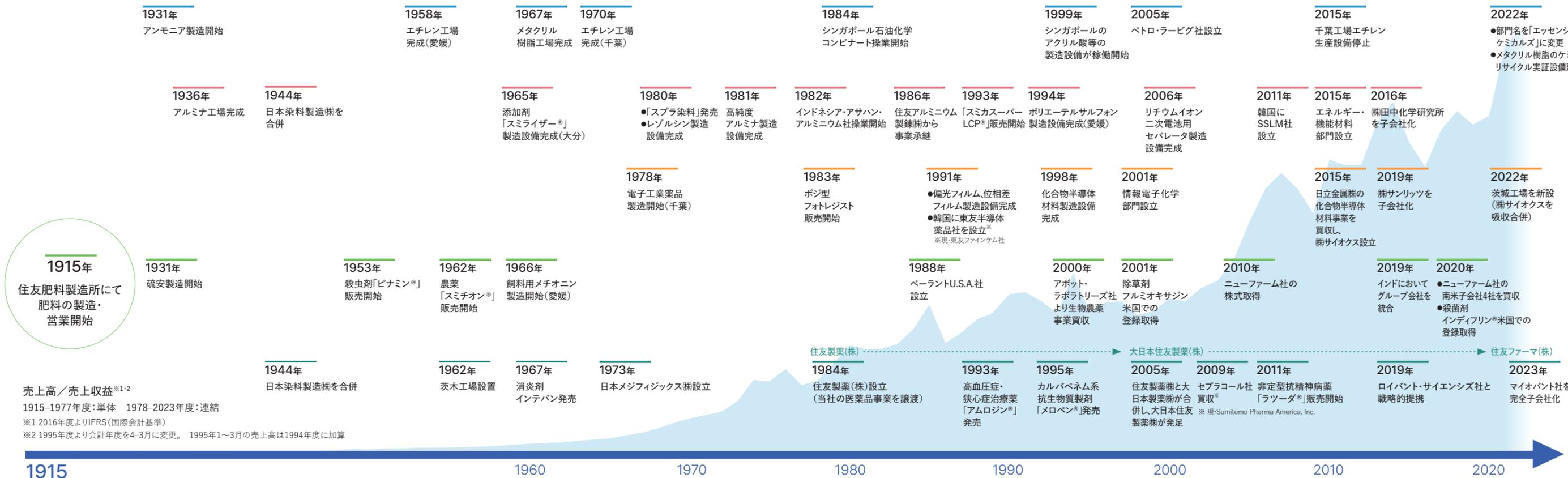


# 住友化学の歴史

— エッセンシャルケミカルズ — エネルギー・機能材料 — 情報電子化学 — 健康・農業関連事業 — 医薬品



## 1915-1940

### 化学メーカーとしての基礎作り

開業後の30年ほどは、「化学メーカーとしての基礎づくり」の時代でした。住友肥料製造所は、銅製錬の際に生じる煙害の防止を目的に発足し、当初は硫酸や過燐酸石灰の製造を行いました。その後、新技術の導入・開発に積極的に取り組み、アンモニア、硝酸、メタノール、ホルマリンなど工業薬品へと事業領域を広げて、化学メーカーとしての基盤を固めました。



過燐酸石灰90間倉庫

## 1941-1970

### 総合化学メーカーへの成長

次の30年ほどは、「総合化学メーカーへの成長」の時代でした。当社にファインケミカル事業をもたらした日本染料製造との合併が1944年、農業化学事業の端緒となった家庭用殺虫剤「ピナミン®」の発売が1953年。そして、1958年には愛媛の大江地区にエチレン工場が完成し、当社の主要事業部門が出揃いました。さらに、1965年には千葉地区において大型エチレン工場の建設に着手し、日本経済の高度成長とともに事業の拡大を進めました。



エチレン工場

## 1971-2000

### 全事業の積極的な国際化

1970年代に入ってから30年ほどは、「全事業の積極的な国際化」の時代でした。この時期にはオイルショック、円高不況、バブル崩壊と外部環境の激変が続きました。当社では、こうした世界経済や社会の枠組みの変化に対応しつつ、シンガポール石油化学事業への進出や、農業化学事業をはじめとするスペシャリティケミカル事業の海外展開など、全ての事業で積極的なグローバル化を進めました。



東友半導体薬品社(現・東友ファインケム社)(韓国)

## 2001-2012

### グローバル経営の深化

その後の10年ほどは、「グローバル経営の深化」の時代でした。2000年代に入るとメガコンペティションの様相は一段と強まり、2004年度からの中期経営計画では「真のグローバルケミカルカンパニーを目指して」をテーマに掲げました。これに沿って、ラービグ計画や情報電子化学部門の拡大など、グループをあげてグローバル化の推進に努めた結果、当社の連結海外売上高比率は2011年3月期に50%を突破し、海外生産高比率も40%を超える水準となりました。



ペトロ・ラービグ社(サウジアラビア)

## 2013-

### 事業ポートフォリオの高度化

2016年度、および2019年度を初年度とした2つの中期経営計画では、「事業ポートフォリオの高度化」を掲げました。当社の強みや優位性のある分野を見極め、半導体・電池材料事業への積極投資や、農業事業における南米やインド等のグローバルフットプリントの拡大によって、景気変動等の影響を受けにくい事業ポートフォリオの高度化を進めています。



ラテン・アメリカ・リサーチ・センター(ブラジル)